

アイヌたち—「私は彼らを極めて優れた民と思う…」

セルゲイ・ゴルブノフ

(Sergei Gorbunov、ティモフスク博物館主任研究員、樺太アイヌ協会賛助会員)

アイヌとはどんな人たちであろうか。16世紀以降、東アジアに広大な白斑部を発見し開発するようになったヨーロッパ人が、この民と遭遇する度に自問を重ねてきた。「多毛の人々」「太平洋の髭面」「毛深い民」「[失われた]イスラエル支族の末裔」とも呼ばれたアイヌは、数千年をかけて極東の膨大な領域(アムール流域、沿海地方、サハリン・日本・クリルの島嶼列、そしてまたカムチャツカ南部)に広がっていった。その足跡はシベリアにも見出されるが、彼らはそこから最古の時代(旧石器時代)にわれらの島々にもやってきたのである。

この物静かで柔和、善良で敬虔な民…。ロシア初の世界周航を果たしたI・F・クルーゼンシュテルンは以下のように語っている。

「私たちが記憶する限り、声高な会話や哄笑とも、いんや口論とも遭遇する機会は皆無だった…。彼らの謙譲たるや格別で、決して何も求めず、ねだることもなく、彼らにものが供与されたときですら、本当にくれようとしているのか、とためらいつつ受け取るのである…。こうした世にも稀な資質は、高度な教育の所産ではなくて、ひとえに生来のものであるから、管見の及ぶ限り、彼らは極めて優れた民であるとの実感を惹起させる」。

まさにこのアイヌの善良・柔和のゆえに、「アイヌモシリ」(アイヌの大地)は少なくとも過去1千年間、近隣諸民族(まずはモンゴル人や日本人、次いでロシア人)による領有権争奪と略奪戦の舞台だったという事態も出来する。至近の2世紀は鎚と鉄敷の間で傷めつけられた—彼らの大地はときにロシア、ときには日本の領土となったのだ。この類稀な土着の民の運命には二大国の政治・領土的野心が反映されている。

1945年、「諸民族の父」ヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・スターリンは、間違いなく彼こそ島嶼部に立地するサハリン州の創設者と見做しうるが、アイヌ共和国の設置も立案した。スターリンの目論見によると、同共和国は北海道東部に加えて、サハリン島やクリル諸島も包摂するはずだったが、彼の企図は同盟国のアメリカ人によって阻止された。もしこれが実現されていたら、われらも日本人も「北方領土問題」に頭を痛めることはなく、隣接諸民族から幾世紀にわたり迫害されてきたアイヌは、その古来

からの大地に自前の国家を持ちえたであろう。

現代のいわゆる「民族誌的」アイヌは、13世紀から1950年代初頭までサハリンに在住した。1940年代末にはサハリンとクリルの日本人住民とともに、アイヌも日本国籍保有者として本国に送還された。しかるに100人ほどのアイヌはサハリンに残留し、その子孫は目下サハリン州の島々でも、またその他の旧ソ連領にも暮らしている。加えて、サハリンにはアイヌの末裔でもある多くの土着民(ニヴフ、オロッコ[ウイльта]、ナーナイ、ウリチ系住民)が、また朝鮮・日本・ロシア系、はたまたポーランド系住民までも在住する。それらの人たちもまた、アイヌと近隣諸民族との民族間結婚の結果この世に生を受けたからである。アイヌ系住民の実数を正確に把握するのは至難であるが、若干の推計によると、その数は二千人に達する可能性があり、その多くは己をアイヌと見做している。しかしながらロシアではアイヌが長らく民族として認知されず、ソ連邦では20年にもわたってアイヌ関連出版物の禁止令が布かれていた。日本政府がアイヌを公式に承認したのも2008年のことに過ぎない。カムチャツカのアイヌ・リーダーであるアレクセイ・ナカムラはアイヌの認知を求めて、ロシア大統領やカムチャツカ州知事へ重ねて陳情していたが、アンドレイ・バブシュキン人権評議会議長のロシア大統領へ向けた勧告を経て、ヴラヂーミル・プーチンは2018年12月11日、アイヌをロシアの土着少数民族と認めることに同意した。「大民族には小民族を守る責務がある」—これは人権護民官A・V・バブシュキンがインターネット上で全世界へ発信したメッセージである。

アイヌは極めて古い時代からサハリンに在住、ティモフスク地区も例外ではなかった。ティモフスク博物館では12月3日、「アイヌ・センター」の創設大会が挙行された。これは博物館に付置された社会団体で、頗る豊かなアイヌ遺産の研究と保存に従事することを目的とする。博物館展示ホールで開催された特別展では、どこの博物館にもひけを取らぬような陳列品が目白押しである。それらは、己を古代アイヌの末裔と見做す才能豊かな名工インナ・シチェチーニナの手造り作品である。彼女の刺繍作品に具現されたアイヌ文様の見事な螺旋はわれらを魅了し、「生活の愛と喜び」を丸ごと内包する



深遠な哲学的意味を、あたかもわれらの視線から隠すかのような。インナは民族的アイヌ刺繍の技術を見事に掌握している。彼女の先祖には遊牧民のジュンガル人もシベリア・カザークも、そしてむろんロシア人も見出されるとはいえ、アイヌ文化への深甚な興味は彼女の体内に、

どうやら遺伝子レベルで内蔵されているらしい。

インナ・シチェチーニナ=左上写真=はペテルブルク装飾工芸カレッジを卒業後、技術デザイン研究所で学び、世界を遍歴する中でモロッコ、スペイン、イタリア、フィンランド、スウェーデン、キルギスタン、フランス、ウクライナ、ウズベキスタン、ラトヴィアを訪れた。現在はカザフスタンに在住、まさにこの地で私はこの芸術家と邂逅した。インナはアイヌの文化と芸術に深い関心を抱き、華麗で色鮮やかな渦巻文様に秘められたものの深奥を極めようと試み、また古代の文様を現代工芸品(例えば日用品の素朴な小袋)に施している。かくてアジア最古の諸民族の一つ[アイヌ]の古代芸術が蘇生し、第二の生命を獲得しているから、この古代芸術は創造への新しい扉、新たな美の萌芽をもたらすような、いまだ目には見えぬ種子を数多孕みつつ生を謳歌している。

今回の企画はインナ・シチェチーニナにとってサハリンで初めての展覧会である。わが国ではアイ

ヌ・コレクションを自慢できるような博物館が頗る僅かだから、彼女の素晴らしいアイヌ刺繍コレクション=右上写真=は、恐らくロシアで唯一の事例であろう。



特別展には北海道アイヌの木彫も、また考古学調査中に発見された若干のアイヌ遺物も展示されている。われらは今や、ティモフスク博物館にアイヌ文化の研究と保存の礎石が据えられた、と宣言することができる。

展示場にはインナ・シチェチーニナが刺繍を施したアイヌの旗—碧いアイヌの空を背景に白雪の上を飛ぶ赤い矢—=右中写真=が陳列されている。これは決して死に絶えることのないアイヌの自意識と文化を象徴する。アイヌ旗は次のような銘文も伴っている。



心は神へ、命は祖国へ[献ず]、榮譽は誰にも[不要なり]

「主」がすべてのアイヌを護りくださるよう、そして世界のすべての民族が常に「愛」と「喜び」と「美」の中にありますように… (西脇対名夫・井上紘一共訳)

(出典) サハリン州の地元紙「ティモフスク通報」58(通巻 8801)号(2019/12/20)3面所収。

* 文中の()は原注、[]は訳注。



ダヌタさん「プロニスワフの足跡を辿る」世界一周の旅を中断、帰国

「プロニスワフの足跡を辿って」世界一周旅行中のダヌタさんが日本に到着し、長崎、神戸を訪ねたあと、東京で講演を行い約 50 人が参加しました。○ダヌタさん、日本上陸へ:井上紘一, POLE99 (2020.1)

◆講演会と交流会 in 東京「アイヌの王の足跡を辿って〜ルーツの発見と日本・ポーランド関係の強まりを目指して」ダヌタ・オニシュキェヴィチ Spotkanie z Panią Danutą Onyszkiewicz, ポーランド大使館 2020.2.25 =左下写真=ポーランド広報文化センター @PLInst_Tokyo 2月25日 より



ダヌタさんは3月半ばに北を目指しましたが、母国と日本で新型コロナウイルス感染が拡大したため旅を中断、3月末に帰国しました(自己隔離2週間)。状況が良くなったら(来年にも)改めて北海道を訪れたいそうです。

※札幌講演は中止になりました。特別講演「プロニスワフ・ピウスツキの足跡を辿って〜ポーランド・日本・アイヌの絆を求めて世界一周の旅」ダヌタ・オニシュキェヴィチ、北大総合博物館 2020.4.25(ダヌタさんは、1918年に独立を回復したポーランド「建国の父」ユゼフ[Józef, プロニスワフの弟]のひ孫にあたる若い人類学者、探検家。2019年1月アイヌ研究者として名高いプロニスワフの足跡を辿る旅に出て、2020年2月日本に上陸。日本への旅は彼女の世界一周プロジェクトのキーとなります。)(安藤厚)